紹　介

平泉澄著・日本学協会編

『平泉澄博士神道論抄』

錦正社　平成二十六年五月　A5判　三一八頁　本体三五〇〇円

戦前の東京帝国大学文学部国史学科主任教授を務められた平泉澄博士は、日本中世史研究の権威として、皇国の護持に努められるとともに、日本精神の真髄を明らかにせられてきた碩学として知られている。福井県勝山市平泉寺町に鎮座する白山神社に生を享けられた博士は、戦後は白山神社宮司として神明奉仕の日々を送られ、「生涯を青袴の一神職として、ひたすら氏子と共に神に拝み神に仕へた一生」（三一三頁）を終えられた。それゆえ、博士の歴史観・国家観はもとより、その全活動の基底に神道論・神道観があることは容易に想像できることである。本書は、厖大な博士の著述のなかから、博士の神道論・神道観を窺う上で適当な論文・講演記録十九篇をまとめたもの。平成二十六年は、博士が帰幽せられてから三十年目に当たり、その記念として編集された。

第Ⅰ部「神道総論」は、神道史上の重要人物の事績に焦点を当てて、「国家をお守り申し上げる」ということ、「神おはします」ことを確信するということ、「「祈る」とはどういふものか」を懇切に説いた講演記録「神道の本質」のほか、博士の主眼であった神道と国家との関係を説いた論文をまとめ、第Ⅱ部「神道の歴史」では、神仏習合・神仏分離に関する論考のほか、伊勢神宮・出雲大社・大神神社・住吉大社・日光東照宮・靖國神社といった個別の神社を論じた論稿が収められている。第Ⅲ部「歴代の御聖徳」には、天智天皇・後鳥羽天皇・順徳天皇・後醍醐天皇・孝明天皇・明治天皇の御歴代の御聖徳に関する論文がまとめられている。最後の平泉隆房氏による「神職としての祖父平泉澄」は、御令孫の立場から神職としての博士の姿を描いたもので、本書を読む上で大いに参考になる。平泉博士に改めて注目が集まっている今日、博士の思想と行動を正しく知る上で、また博士の御遺志を継承する上でも必読の書と言えよう。

紹　介

『関東大震災と皇室・宮内省』

堀口修著

創泉堂出版　平成二十六年七月　A5判　二〇四頁　本体四〇〇〇円

関東大震災当時の日本は大正デモクラシー状況下にあり、新たな国家・社会のあり方を模索していた時代であった。皇室と宮内省もその存在意義に危機感を持ち、国民との結びつきをより重視するようになったと思われる。その意識の現れのひとつに関東大震災時の救療活動があったとみて、具体的な対応と施策を明らかにしようとしたのが本書である。

震災時、皇室は、救恤金をはじめ、医療品や糧食など速やかに罹災者へ下賜した。また、摂政裕仁親王・貞明皇后・各皇族は、被害の状況を積極的に把握すべく視察や慰問を繰り返し行い罹災者を激励した。さらには産前産後の罹災婦人、罹災小児の疾患を心配された皇后の強い意をうけて宮内省では巡回救療班を迅速に組織し、東京・横浜での救療活動を献身的に行い、この延長線上に、皇后の思召をうけた大正十三年・十四年の歳末の貧者救済の宮内省侍医寮臨時診察所の活動があった。

罹災者に対する皇后のきめ細やかな配慮は、様々な方面に見られた。三万人余が痛ましく焼死した本所区横網町の被服廠跡に、新宿御苑の花を用いて花環を賜わった。また思召により下総御料牧場から乳牛十頭を渋谷御料牛乳所へ移され、困却していた乳児や疾患者への牛乳の配給に意を注がれた。さらに十二月になると罹災者に晴れ着を賜うため自ら縫い針をもち、多くの女官や女子学習院にも裁縫を仰せ付けられて、日本赤十字社・済生会に賜わった。皇后の配慮は外国の使節団にも及び震災時お見舞いとして在京各国大公使館に羊肉・野菜・葡萄酒を賜わった。これらにより、震災時の危機的状況で、皇后が如何に国内外において重要かつ的確な配慮をされたかが理解できる。著者は、貞明皇后の姿をとおして、近代の皇后の使命と役割についての研究を深めるべきこと、また一方で官衙としての近代の宮内省研究を切り開くことを本書において提言している。

紹　介

『世界の中の神道』

佐藤一伯著

錦正社　平成二十六年十月　四六判　九六頁　本体九〇〇円

筆者はこれまで『明治聖徳論の研究――明治神宮の神学――』（国書刊行会、平成二十二年）を刊行し、明治天皇・昭憲皇太后の「聖徳」・「坤徳」に関して思想史の研究手法を用いて論じてきた。本書に収められているのは前著刊行から現在に至るまでの間に発表した学術論文を基にしているものが多いものの、頁数や体裁、言葉遣いなどが直されており、より分かりやすく伝えたいという筆者の配慮が感じられる。

第一章「世界の中の神道」はW・G・アストンや新渡戸稲造といった近代の日本学者の神道論を、著書を基に紹介している。その際には引用文献も丁寧に確認し、近代の神道論が日本と欧米の学者の相互影響のもとに形成・発展していたことを示唆した内容となっている。

第二章「明治の聖徳」は、五箇條の御誓文や教育勅語、唱歌「金剛石」、そして御製や御歌などから明治天皇・昭憲皇太后の「聖徳」・「坤徳」を偲びつつ、同時代の国民の天皇・皇太后に対する敬仰追慕の念を検討しており、「明治神宮の源流としての聖徳」では明治神宮創建に繋がる国民感情が論じられている。

第三章「神社と崇敬」では明治神宮、靖國神社、護國神社および著者の奉職する岩手県一関市の御嶽山御嶽神明社など、近代に創建・再興された神社を中心に論じている。靖國神社や護國神社の前身である招魂社に関する案内記も紹介されており、各社が担っていた文化的側面を映し出している。

近代の新聞や雑誌などのメディア資料を用いて、当時の人々の明治天皇・昭憲皇太后に対する景仰追慕の念を検討するという研究手法は前著にも見られた筆者特有の手法であり、当時の国民感情を活き活きと伝えていてとても興味深い。明治神宮の祭神論、または明治神宮史を研究する上での好著と言えよう。

紹　介

吉野亨著

『特殊神饌についての研究』

武蔵野書院　平成二十七年二月　A5判　三二五頁　本体一一〇〇〇円

著者は、特殊神饌の特徴を、祭りを行う人々―本書では「祀り手」とする―の信仰的・社会的生活の表出と定義している。そして神饌を供える人々、つまり祀り手がどのように神社や祭りに関わり、社会生活においてどのような生業を以て生活し、文化的な営みをしていたのか、祀り手が祭りを行うことや神饌を供えることにどのような意味を捉え価値観を有していたのかについて、それらの信仰や価値観が形成された環境を含めた上で特殊神饌の分析を試みている。そしてその対象を、祭りや神饌の歴史的変遷を確認できる文献史料を有する神社で、現在も特殊神饌を継承している事例に絞り込み、饗応神饌（食事形式を主として調えられる神饌）として香取神宮大饗祭神饌と彌彦神社大御膳、供覧神饌（見せることを重視した形が調えられる神饌）として北野天満宮の瑞饋神輿と御上神社のずいき神輿、生調（いきみつぎ）（鳥や魚などを生きたままに供える神饌）として気多神社の鵜祭を取り上げている。

著者は、特殊神饌の形成される要因をめぐって、神社周辺の地域生業が、祭りに直接あるいは間接的に携わる人々の信仰を形成する重要な要素となるばかりでなく、神社の祭りの目的や意義、神饌に用いられる食物類にも影響を及ぼす契機となったこと、食事形式や調理技法を含めた食文化と風流作りものに代表される風流等の文化的要素を祀り手達が取り込んでいったこと等を指摘している。また、従来特殊神饌は古い信仰や文化を形式として保持し継承されていると考えられてきたが、著者は各事例の考察により、現在見ることができる特殊神饌の形式や作法は、実際には多くの歴史的変遷を経て継承されたものであり、この点を踏まえてはじめて詳細な考察が可能であることを明らかにした。

また今後の展望として、①事例研究の蓄積と類型化―比較研究への展開に向けて―、②食文化との関連性、③神饌と饗宴、を示し研究課題としている。

紹　介

『現代の産育儀礼と厄年観』

田口祐子著

岩田書院　平成二十七年三月　A5判　三四七頁　本体六九〇〇円

現代の日本人は、信仰している宗教をもっていると答えなくとも、人生の節目には驚くほど宗教的な行動を示す。何が彼らを駆り立てているのか。その背後にはどのような心性があるのか。本書は高度経済成長期以後、現代社会の象徴である東京を中心とした都市部における「安産祈願」「初宮参り」「七五三」「厄年」の四儀礼の調査を通して、現代の人生儀礼の実態を解明し、その意義を考察したものである。これら四儀礼は、いずれも女性と子どもに関わりの深い儀礼として共通点を有している。

各儀礼の実態把握は、主に儀礼の執行者（社寺）と参加者の両者へのインタビューやアンケート結果の分析による。著者独自の母親のネットワークが縦横に駆使されていることが、本書の内容をリアリティのあるものにしている。その結果、各儀礼は、①社会的承認の縮小・喪失、②霊魂の関わりの希薄化、③社寺参拝への画一化など、これまでの伝統的な意味からは大きく変化しており、その背景には、子ども観や人生観の変化、メディアの影響、子ども写真館の登場などがあることが明らかにされた。しかし、そうした変化が見られても、「現代人は、人生儀礼にみられる宗教的要素に、他では得にくい自分と社会をつなぐもの、また過去や未来へとつないでくれる確かな要素を見出している」とし、現代日本社会における人生儀礼の意義を指摘している。

現代人にとって、人生儀礼に見られる宗教的要素は、なお魅力に満ちたもののようである。しかし、高度経済成長を経て大きく変化を遂げた人生儀礼が、これからのさらなる社会変動のなかでどこへ向かっていくのか。それに対して社寺はどのように対応していくべきか。そのとき、人生儀礼に見られる宗教的要素は、なお人々の心を捉えるものをもっているのか。本書は、単なる儀礼の実態解明にとどまらず、それらを考える上で多くの示唆をも与えてくれる。

紹　介

中野裕三著　〈錦正社叢書〉

『祭神論　神道神学に基づく考察―明治神宮・札幌神社・外宮の祭神―』

錦正社　平成二十七年四月　四六判　七二頁　本体八〇〇円

本書の基本的なテーマは、正しい神社神道信仰とは何か、という問題を学問の課題とする神道神学に基づいて、神宮（神社）に祀られる祭神を分析することにある。

第一章「明治神宮祭神考」は、明治天皇と昭憲皇太后との御魂をめぐって、「記紀神話」及び近世国学者の言説に示された有史以来の正統な神道信仰（他界観〈幽冥思想〉・神観念）に基づき、御稜威（みいつ）著しい神霊であることを、論証したものである。

昭和十五年に設立された神祇院に於いて、伊勢の外宮の祭神豊受大神をして、内宮祭神天照大御神によって祭られる神であるのか、否か、という問題が議論された。第二章「外宮祭神観の変遷」は、当該問題が近世の神宮学者や国学者の言説に遡るものであること確認し、その事実に基づいて、一部宗教学者から天皇制ファシズムを鼓吹した国家機関と見做される神祇院を、学術的な視点から、公明正大、且つ自由闊達な組織であったことを論証したものである。

北海道神宮の前身である札幌神社の創建は、明治二年九月、明治天皇の勅旨による神祇官に於ける三神の鎮祭に遡る。その際、中心に大國魂神が祀られ、「之れに大名無遅神・少彦名神を配祀」した。第三章「札幌神社の祭神――大國魂神の神徳をめぐって――」は、その史実に着目し、平田篤胤以降の平田派国学者によって、大國魂神は国造りに御稜威を発揚された大名無遅神（大国主神）の荒魂と規定されていた事、かかる「開拓三神」鎮祭に先立つ明治二年八月の段階でロシアの脅威に対して蝦夷地確保は、明治政府の喫緊の課題であった事、等に従って、大國魂神が我が国固有の領土を脅かす外寇に最も御稜威を発揚する神であると信仰されていた事実を明らかにした。以上本書は、神社神道界に於いて、御祭神の御神徳の問題を、学問的にどのように一般に向けて説明していくのか、という問題に対するサンプルを示している。

紹　介

加瀬直弥著

『平安時代の神社と神職』

吉川弘文館　平成二十七年五月　A5判　三二〇頁　本体一〇〇〇〇円

古代以来、神社を中心とする場で神まつりを執行する人々のことは「神主」「祝」「禰宜」など多様な呼称で呼ばれていた。本書はそれら神まつりの執行者を「神職」として総称し、平安時代を中心に当時の社会における役割を解明することを目的とした意欲的な著作である。公文書の記述などを博捜し、当該時代の神職に関する総合的特質を広い視野から考察している。

本書は、序章「本書の刊行趣旨と構成」、第一部「神社修造と神職」、第二部「神社の社格と神職」、終章「平安時代の神職の特質と神社の展開」で構成されている。第一部では、神社修造の検討を中心的に行なっており、神社および神職と朝廷・地域社会の関係性を論じることで神職の置かれた立場を考察している。また、「奈良時代・平安時代前期の神社と仏教組織」との一章を設け、当時の神祇信仰を考える上で避けることのできない神仏関係について論じている。

第二部では、「社格」に注目し、神職が社格の向上において果たした役割の考察を目的とし、神階奉授の意義や、一宮の成立を対象に朝廷・神祇官と地方神社との関係性を論じている。特に神階奉授については、「平安時代の諸国における神社の社格」と「文徳朝・清和朝における神階奉授の意義」で論じており、文徳天皇朝（八五〇～八五八）に朝廷が特別な関心を寄せた神祇に三位以上の神階を奉授する秩序が形成され、その後の神階奉授の基本原則となったと考察すると共に、斉衡三（八五六）年四月二日の太政官符から三位以上神社の神主・禰宜・祝に把笏が認められたことを取り上げ、神階を基準とする祭祀者制度の構築を見ている。社格の向上は神社の公的性格の高まりを意味し、それに応じるように神職も公的性を帯びて神事を担っていたことが論じられている。

古代における神まつり、神社における神職の役割を理解する上で欠かすことのできない最良の一冊である。

紹　介

鎌田純一著　〈神社新報ブックス18〉

『慎みて怠ることなかれ―鎌田純一論集―』

神社新報社　平成二十七年六月　新書判　二五七頁　本体一二〇〇円

昨年七月十五日、九十歳を一期として帰幽せられた鎌田純一先生の一年祭を記念して、先生が『神社新報』等に寄せられた論説や随想をまとめた論集である。先生は皇學館大学教授として、多くの神職を育成せられ、また宮内庁掌典として、平成度の即位礼・大嘗祭に奉仕せられたことはよく知られているが、加藤玄智博士と直接の面識があり、本学会の直接の前身たる加藤玄智博士記念学会の頃より理事として、平成十三年よりは明治聖徳記念学会顧問として、長きにわたって本学会にご尽力頂いていた。書名は、倭姫命が日本武尊に与えられたお言葉として夙に有名であるが、揮毫を求められた際、先生がよく色紙に書かれていた言葉という。その由来の一端を記したのが、本書に収録されている「加藤玄智博士の想い出―慎莫怠―」（『神道研究紀要』第八輯）である。また、本誌復刊第五十号に巻頭言として寄せられ、恐らく先生の絶筆となった「明治の精神」も収録されている。

第一章は「皇室と祭祀」。宮内庁掌典・同侍従職御用掛のお立場から、祭祀を厳修せられる陛下のお姿や思し召しが分かりやすく語られている。これは、陛下のお側近くにお仕えし、皇室祭祀に通暁せられた先生にしかなしえない。第二章「随想類」・第三章「神職の養成と研修」には、主に『神社新報』や、皇學館大学関係の発行物に寄せられた随想が収録されている。少年時代や駆逐艦航海士として従軍した想い出を語られたものもあり、そこから先生のお人柄が偲ばれて興味深いが、多くは神社界への厳しくも暖かい提言となっている。第五章の「論説」は、他の章とは少し毛色が異なっており、専門的な内容を含んでいるが、それぞれの論説から、國學院大學・皇學館大学の淵源、神道とは何か、神宮式年遷宮の本義を知ることができる。いずれの論説・随筆も、考えさせられる内容が多く、これからの神社界を考えたい人には参考となる提言に満ち溢れている。

紹　介

『神道と学問』

阪本是丸著　〈神社新報ブックス19〉

神社新報社　平成二十七年九月　新書判　三三二頁　本体一五〇〇円

これまで、神社神道界（学界・教育界・神社界）に於いて八面六臂の活躍をしてこられた阪本是丸博士の既発表の短篇、エッセイ等を改めて編集した新書が此の度刊行された。神社新報の「主張」欄に掲載されたコラムが本書の凡そ三分の一を占めていることからも容易に想像できるように、本書の内容は、現今の神社神道界あるいは社会の趨勢を視野に入れた、真に時宜に適った斯界（神社神道界）への提言という側面を、明確に備えている。振りかえって、斯界の最も喫緊の課題とは、我が国の様々な領域で、伝統的な価値観や物の考え方が忘却されていく過程にある只中で、いったい神社神道は国民一般に向けて、何を発信しどのような役割を果たすことができるのか、ということであろう。当然の事ながら、その営みは、将来の神職を目指す学生も含めた所謂神社人が学問と真摯に向き合うことを、前提としている。

本書のタイトルからも明確なように、現今、全体的に云えば、必ずしも学問を十分に尊重しているとは言い難い斯界関係者に向けて、如何にして、学問に向き合うべきか、乃至は「強いて勉めて学ぶ」という営みを自分のものにできるのか、という提言が随所に散りばめられている。その軽妙洒脱な博士の書き振りに、思わず笑みをこぼしてしまうこともしばしばだが、「大嘗祭」「神宮大麻」「陵墓」「英霊祭祀」「五箇條の御誓文」「戊申詔書」「明治維新」「祝祭日」「皇位継承」といった神社人が避けては通る事の出来ない根本的なテーマに関して、その本質理念を平易な言葉で解き明かしている。博引傍証にして優れたバランス感覚を備える博士一流の才能に感嘆するより他にない。

斯界関係者必読の書であることは、改めて指摘するまでもないことだが、現代神道が抱え、明確な指針を示そうとしている博士の取り上げた個々の問題は、一般読者も魅了すること、間違いはない。